

「最小限の家作り」第3回の報告 10 日夜 7 時から 11 名の参加

- 1、

今までの経過の整理、コンセプトの確認。

質素な暮らしを表現した家。	農の会的暮らしの方向を検討。本質的な意味で豊かな暮らし。
自然に馴染んだ家。	美しく風景を形成するような、家でありたい。耕作地との融合。
循環する合理的な家。	利用可能時間を決める必要がある。2・3年か10年ぐらいか、100年か。
必要最小限の家。	四畳半に1人、1間半のキューブを基本にしたら、高床式、テラス的機能部分、屋根の意味、床下収納による断熱、床下が家畜小屋。
安心して眠れる家。	これが案外難しい。シェルターとしての家。
センターハウス	各戸にいない機能を、何処か別に設ける必要がある。
地域で入手できる材料の家。	竹は注目。廃材やガラス等どう考えるか。
自然エネルギーの家。	今後の課題。ライフライン、別個部会を設ける必要がある。建てる場に応じて考える。

- 2、

杉本先生の意見を伺う。

映像を見ながら、杉本先生の仕事の説明をしていただきました。私達が考えていた、範囲を超えて自由にさまざまな形態と、構造を持った、オブジェ的な建築物が、ある事が分かりました。地域材の利用と言っても幅が広い事、特に竹という素材を利用した自由さは、発想を転換させられました。実際的であり、オブジェ的に美しい家。スペインの建築家は日本的なと感じていた美を、現代建築に再現していて、平面の壁の構成の美しさは、取り入れる要素がありました。

最小限の家づくりは、最適な指導者を得て、今後のすばらしい展開を確信できました。3 回目をもって最高潮に達しました。この面白さが、新しい暮らしを考える多くの人に伝わるように進めたいと思います。農の会のが目指す家は、生産現場であるだろうという指摘は、示唆に富んだものでした。

- 3、

行政や、法の問題への対応案は山田純さんに検討していただく

- 4、

南足柄市「高田茶室」 廃材を利用した茶室と最小限の家

安井清氏(すきや建築の一人者)からお話を伺う。

最小限の家のあり方は茶室から学ぶところが大きいと、思われます。特に、庭とのかかわりが、建物には重要な事、これは畑との関係に生きるでしょう。2 畳半と言う狭い空間を広く感じる、最小限だからこそ生まれる精神的空間。秀吉の農的感性は、高床の農家茶室もつくる。数寄屋造りの歴史を研究してゆく事が、大いに役立ちそうです。廃材を美しく使う感性。ただし、茶室のもつ遊びの高度な精神世界と、生産の場と言う実用の観点との違いも、浮かんできました。最小限の家は農の会的暮らしの実用に徹底して迫る事で、「用の美」に至るのではないのでしょうか。

- 5、

これからの予定「コンペについて」

次回 20 分の 1 に作った、モケットを持ち寄る事になりました。その上で、みんなでコンペも含めて検討してみる。一方、実際に 1 棟作る事も、具現化してゆく上で大切な事なので、どれを製作するかを、次回検討してみる。現在、候補地として笹村自宅奥に現況竹やぶ山林 300 坪を購入したので、そこも候補地として考えられる。又、農の会の集荷場も作る事になっているので、集荷場として試作するというのもある。次回の集まりは、暮れの押し詰まってか、年明けになるかと思えます。

- 6、

見学会について、伊豆、下賀茂の自給自邸。

自給自治の中でも最も美しい建物だった下賀茂の家を、冬の農閑期の間、見学したらどうか。

